



新田義統功臣録
四



新田義統功臣録初輯卷之四

求馬感冥助做皆話

寛靈換生爲天宗話

且説主計の宿志遂するのこの縲綆の者もあり京兆尹府に在り既
 み廳前みひき出され鞠問せはあまけひく梶井宮の内物部
 主計とてははよのなるが這般々々其事ありて彼所不至りて實事
 明白のなるも此時の京兆尹の依々本依渡判官入道道譽とて奸
 佞の徒なりし前年驕奢の餘り公家毎礼を做ける罪をりて今
 此官を遷せしむるは公家を恨む折らる只今主計とて是
 梶井の宮に居るもの者なりと名號を以て其罪も不糾程く盜賊
 の罪もおとし六條河原にわたりて死刑を行はる丁を殘忍にせしむる



曾本義統功臣録卷之四

天宗

繪本壁落總卷之日



求馬刑罪場工
至リハ
主計ノ屍首を取



求馬と王計の寛罪を遭く非命を死せしむるを憐み密にその屍首を乞
諸く東山の邊某の寺の主斗と師且の因もあるは彼に葬りて家も財
は愿の財宝へ慶せりも不残寺に納る追摩の料となりぬ斯く后に
此地方に足を止むべき方あり一銭の時ありといふも已日斯くも果を
あふ福ありや乞食花児の状を倣ふも東國に趣らばや暴に洛陽
をくち出し生ずる圓通佛を信じしは清水に謁越すこの子を祈
大士閣を生んとす時既夕暁の左側をなりしは急ぎ旅路
たふねへ今宵と這宝殿は夜を明し天明に至らばとく旅發へと圓
通の宝前を端座し経を誦し寶號を唱へ只管冥助を祈するが
何中人膝の上を落ふよのありとく足を着るは只是一封の願書
あり上願主孫生とありと具へ何とやん耳にされる名ふと思ひ

あがらこれを内陣の地をく原の所は還り座しありけるは怪いふは
願書求馬が膝の上を落ると三回ふ及びは六太も異しと云何なる
那書なりは之回答く我前を落りるは是只車を転ぎて此出を
我に授けは狂佛のみをひあはせと感悟し其文を讀するは其妙成
又黒玉あり我想くるく配偶ありははじりて命を絶くたると云ふ
を寫しあり是更ふ我心を想するはとく道理解し難くも圓通
佛の倣ふは鹿ありとの故なりと云ふを懐きて懸けり放下二頭却説
這裏董平が女兒孫生にぬる夜想ふ人よ遠く心樂しとてありり
あふぬ人の志も前日清水に肉麻調戲する醜漢にやるといふ
酷く惱むる當時巡捕吏の事ありと云ふを偷児なりとて捉ま
使疫鬼報館言の想ひを倣しと云ふの意を易んせと云ふ

金瓶梅詞話卷之四
三 長生玉

人々と思ひ樂にしてこの差厚しれば大方便を多し只願想ひし沈
遠も病ありし身は父母もこれを愁ひ其病を察ありしときふあ
光景おまは密に借し乳母を伺て伺て伺ての証へけし
も右説元説く遠よその實情を説き乳母仔細を重
平丈婦斯と告り董平は酒家も彼少年を女婿せんと
想ひしを菴を託しども宣料人や術悪賊はし双才を鷹り不
義を行くしその計策露を人を寛罪殺し禍その方なる
へまに至り只得亡命し去向知るべし便なき道を失ひし何とも
すき術あきも女兒斯とて想ふ人へ今や神佛の覆庇を頼
ちるより対ふる女兒は素圓通法佛の神授見やれば清水
母涓觀世音を祈しとてめらん此日をせしめし只願清水

謂ち今日も七日月の満ちたる日とて謂てん所は公の
けり費す陰漸中々晩の右側清なるまあり大士閣を参り拜し
終り傍をくると一個の少年稔念しあり多きを奇特のその哉
眷一着正足已が女兒の墓に入るれば大母喜び引く云足下今
春我這地よわく光棍と違ふ致累をりしを救むる恩へま
すがや拙翁の時火急に貴名を同すわきまを足す
一言の謝も及ぶ過め奉る禮を乞へりさるるいふ山罪を赦し
多人君が住むる方何處も貴名何と申せりやせりやを拙翁の山
科の農夫董平もそのなりと板地は速き身は求馬急し礼を回
し云今春の一件小可が友令愛を致しを傲しは是より謝と
きを何ぞか懇勤の禮を受へり小可は素東園の産はしり求馬

ときこのちるが遊学の爲京師ある交既五年只今故郷へはるわ
 あるこの年頃此種佛を信し惜別ちるんと湯をさる董平
 云足下年記少かり斯のぞ佛を信し其奇ある事なり抄
 籍も此觀世音を信し七より年記し頃日頼あることあり日
 一の今日も七日は満子日あり足下は逢へて心は其大慈の眞
 助し想ひ中するてあまは今宵の拙翁の茅屋小亭より之熱と説法
 をきこありと頻に涙へり辞さるる亦連々往るるほど董平
 の家に至るはバツグ一室は清く烟葉の食ありと名妻を呼しこれ我
 交會再清水の一件を説く感涙の極多けれ侍兒ホ金堂
 王盤は酒者佳酒を盛りて席上を連ねり董平進出り云前日の
 恩を報ひさるべき爲は此酒を呈するなりと王盤をわて

求馬は勸め舉家うちりり懇懇小御食ゆる求馬尾殺りて多々不
 辞まきても董平さるるゆらさざり顔酒者を勸め既而酒宴聞ふ及
 りりこも弥生頃日さるる病めれも今宵さるるの未は猛病苦
 を忘る甚喜べる光景面は顔よりれは父母これを惜し余しく琴を弾
 ちるるまふり此道不堪能なる其曲最微妙は幾分の真をぞ
 添はされ求馬も兼々音律は委しうりしる耳を清くこれをも
 其音中関怨の情を言ふ大に拙公の恥まされは偷眼は弥生を人其
 彼もさるる眼は求馬を着る甚恥らひる光景は十二分の姿色不
 正は是月宮の嫦娥貝闕の龍女此人間小も遊へる疑ふこと
 上の粧ひされは忽然として春心動りて弥生頻りに琴心をりて拙
 りれは思ひも數杯を傾け酒氣六七分なる心蕩くさる當時弥生杯を



新之助
新之助
新之助
新之助
新之助
新之助
新之助
新之助
新之助
新之助

あけく將に戯まんとするは原未謹厚の求馬猛放心を収めさるる小
 可不料も如此饗食應に遭感佩さるる言ふに己五十分の醉を極め應に
 去礼を爲んとす願ひの這席をのり多くと辞しければ此時董平尤右を
 退じしめ席を迫りし言奉るなりといふも足下室をたうち多るや
 求馬云しむ此車は董平云吾も託ちわらさるべき一車あり何れもあ
 る肯ひ多ひなんや求馬云今宵の徳の報をきあはれは小可が身はけい
 きり夏ゆしあふ佳ぞ辞すべき董平附しむ云人の親むと思はる者
 とふし我年四十は及まじ只一子とあはれ朝暮これを患ひ清水の圓通
 佛を祈り一人の女兒をりつけぬをい孫生とて今年十六女は成
 りせり前日清水一件の折し足下を着しり只願想ひの迫り
 頃日心比例あはれは夫婦をを嘆けり足下の在ま所をたぢら孫はせ

十人あき清水の圓通佛を祈り足下を捜索る処に今日七日五當
 たる日小可ひ不思議小も足下は回遇吾家も傷ひまはるる正し
 圓通社佛の結び多る赤繩を想へは吾女兒甚粗人なりと之も程
 妻にもひなんやせりまは我等夫婦の幸ひ女兒が喜び是は過る
 有べしを願ひて説まはるるを叶へた人と餘義あり頼めるを求
 馬熱く聞ひ小可嚮め何れも肯ひと云ふも此の
 小可は肯ひ難きとあり其縁故とて小可が従弟なるこの六の
 春清水も令愛を着し了は迷戀熱時も忘る隙なき折は
 不慮の悪醫をれを精し皂白紅緑の鴈きをく金の銭を金有り終小
 と是が爲に寛罪に刑せられし如しある人小且深きは
 是は遠事をは救さるる困辞も董平嘆息し

主計哥々々足下の從弟もく在るる非命之死もく人痛し
 是心より做る業あれは只得は我且説べき事あり足下原素清水
 通仙を信じしより宣ふ事あるは吾言を肯ひしは其の
 事も想ひ死ぬべし然るに足下をわたりては是殺も同じ
 佛意も乖ふ何宿志の遂るべきを得べんやと右説充説求馬も是
 心中醉ふがごとく是非も分弁難く踳躅ありき熱く思ひ
 回らざる今日之士閣も得る願書も弥生もくも其の是は此
 家の女兒が願書もく圓通佛の赤繩を結するもや不如これを試ん
 ぶへと懐の裡より彼願書を出ししは此書今愛の寫りもやとこの
 端を示ししは董平熟着く是乃女兒の手字なり奈何して得
 りしと問へば求馬もくわたりて之は感悟し此書を得る縁故を詳

説く后云らく事既に如斯なる人正に是圓通拜佛の命なり
 を佛意に從ひしと云ふ董平の説話の通りなり願感涙を止め
 りありしは活法終りて右清水の方を伏拜し書紙門を閉ま
 くらぬと云ふ家彼所もく一五十一を聞て是渾清水觀世音の眞跡
 もあるものなりと夫婦雀躍し求馬もく是く感謝し斯く後
 園家の喜びのたゞにあらずも弥生も喜びもする物ありけり
 ずしく病は然れどもはたぢふ良辰を櫻び婚姻を敷くは頻
 其準備を做し既ぬ日もありしは求馬も衣服を草もせり
 生質の好男児なりと今又仕麗ある衣裳を穿しこれに只王公の
 公子なりとも尚恥らふべきお扮なり斯く威儀を整へ士口席も出る
 花燭燈連恰も白日の通りあり此時弥生も今宵が一世の晴なり



求馬孫生と
誓烟の床へ
主計の宛先
まき



十二分の粧ひを凝し待女は助けらるる先景へ生平より尚哉分
 うけ姿色を添へて揚妃照君も面を掩ふをうりあり二人は相望見
 く心中互に喜び満面生春色既に醜盃のしも過ぎ且董平夫婦も
 きんかり血属をたぐひ笑み家の奴婢に至るまで大おそれ上下打交ひ
 く歡の盃敷巡し賀詞さへなかりるる夜もいづく更めれば乳媪待
 女亦求馬孫生を紅圍しあひ将は鴛鴦の褥に入ちんとし寝席成
 圍る画屏をたきえり帷哉顔色憔悴する一個の漢子睡褥の上端
 坐しありるる只今二人はまを着る角笑せ容貌は甚凄涼怕
 ちれぬ孫生をけりぬ乳媪待女亦均く呼と叫び仆轉ぶ時は彼漢子
 貌忽然としく一團の鬼火と化し隠々と飛ちると均く棟上は甚ま
 げるる声しつゝ阿々しくも笑ふ這時求馬も将足主計が寛鬼やうと

想ひりしは心裡に圓通佛の宝号を唱へるるち孫生も侍女も甦生
 きりしは又申意を易し侍婢もむろい這事他は漏とくむむ堅
 戒も席を轉し遂に二人鴛鴦の褥より巫山の夢を結り
 斯く後何の怪もあらず夫婦十分れ恩愛ありし孫生もなれぬ
 ぶとありしは董平夫婦求馬をすしかり國家喜びをばす方
 子優恤るるが月満く易らるる一男兒を産じし一家挙りて大
 らぬ飲ひよるは是掌中の玉挿の如く慈しき育るるが先度易く此
 兒今年二歳よりあけりり父母も清らなる容貌ありはた
 と想ひりし父母の露むりも似む何とやん主計が貌は彷彿せぬ
 求るま夫婦の婚姻の夜のしを想ひ出し奇怪なる思へりし恩
 愛のしかり人みの語るる不便をぬり然る一日乳媪董平



此の
書は
大
正
十
年
の
事
也



求馬一子を
再生せし
知

を乳媪が懐き臥し求馬の紙門の外に躲居る其動静を窺ふ其
夜へて天の色曇りて微雨人際出しく四方蕭索としく甚
折りてや四更の鐘声荒くと響き均しく一陣の風颯と
忽ちとして身柱栗く折りてあるは恠哉只今や能睡つは
小児むくく起乳媪が寐息を窺ふて一盞茶時はやくやう
燈もすくくちあつて從ひ漸くと身軀大に叙眼の光は只
鏡を双懸るがわくわくは耳の根を裂きを大きく開き
も炊烟に似たり其光景再目も見るべし正に悪鬼羅刹の
がさすこれ求馬も少刺呆れ立ちたり斯くありて
き飛く小児を捉換伏して膝の下に立ちあがり下より
の強きと庸くより我方増りも原末武藝は熟し心剛なる
馬が走り歩くこれを動かさずそのうち此駮をなす董平夫婦
生も走まらざるを著る其形容の怖く物事此時這小児
今年儂は二歳なるの母弥生を恨じげ白眼く以我は是物部
我汝を想ふ其甚切やりを汝が難面心より終ふ此を究罪の
あはれいも尚執着の幻滅びも一回の禱を均せんとも生を
来まも恨りや我を乳媪に抱樓しあふも遠きけと怒り不
眼中血をそそぎ吐息火を出しは求馬今たまたま忽腰刀を
間を刺さへ一声呼と叫びて死にたり斬りて一道の黒氣
なら昇と均しく雲中より声ありは今斯ふはも請着ひつる
をくまぐやのくまぐしと叫びり嗚呼此生計が寛息了菴を恨
何を茲の之矢宗を知らん且下回も分解を聴

夫婦祈佛夢攘怪話

了庵貪欲縊息諸話

且説も其の董平の家何の妖祟もあらず無爲ありり
ちよ孫生の我子の怪げある鬼形となり亡りて大よはるき且嘆き哭
ちるつらつらの病もなりちよ母のさきなり求馬も深くこれを思ひ
方は醫療をさすも少の験もあらずけしむに園家うち奪ひこれ
只車もあらず怪してちよのききと恨むる董平がえらく酒家想ふ
主計の寛恵の做らざりおほゆは早く彼が追福を作さべし是より
只願帯車を堂に主計を葬する寺をせしめし門ふとる乞食を
も多くの本錢を施し也一面もちよ年頃信し奉る清水の親世音を頼
まりて此回の妖祟を攘ひ孫生が病頓に愈ゆると日毎ちよ歩を運て

祈ちり如此事も做り驗も孫生が病日よちよ快くありし
拳家大よ喜び是正し圓通佛の覆庇に因るものちよちよ感激
またちよ求馬孫生を誘ひ還香願の爲清水に詣ち士園は通夜し終
夜香を焼経を誦し佛恩のかじけあきを謝しありりちよ
せいの左側よりちよの頻に睡を催し二人も寝むもあらず
夢にまた婦相傳は這圓通閣をちよ歩むもあらず湯くじり一坐の
禪堂の前を過る夜もいそ更甚疲勞しけしむに今宵も安ら宿
らちよやと裡に入り着るは一個の僧檀上し読経しちよちよ今宵は
ちよ宿りをとむは僧とちよちよ肯ひし秘に二人喜び堂の傍に憑て將
ちよ眠らんとすも読経の声耳の底に入りし睡もちよちよありりちよ求馬
偶ちよ頭を回し僧を着るはちよの如何は僧は是僧あり前年亡

誦するて高りありしは董平が家更は些き怪もあらず
 不在話下却説竹林了庵の奸計をりて主計を鶴まき
 を貪り事既ふ登えぬべかりしは洛陽の住居なり難く西國は
 方へ赴くやと私に旅行よりゆりて松の尾を遇り折りて日暮りれ早
 く宿りを索めたりやと四方を顧回し遠なる山中に一軒の白屋あり
 心城く遠足く往所に至り宿りを索む縁由りぬへき人の住
 住居とおほく裡肉は麗らざる女の方積ありり其状年記二十
 かりとおほくきつ今了庵の宿りを乞はせし頭を挙て應答
 ちるは津の宿のゆせまは夜の衣いさなりすあはき飽くあし
 ろやまを厭じて宜くも今宵は主翁もおぼしき這りて
 ひやすく云了庵は力を乞ひし原末好智深き徒なら己の

形容の僧よりをりて猛欺ひりて貧道は是東門より
 も既に五十を過ぎれば柳下惠に比せし誰か異しむべき素より行
 脚の才やま何ぞ飽食時衣を需人たる軒の下ありとも一夜
 をふ明させしあはは是よりき事ありし甚殊勝らば
 乞索はむば女うち點頭くゆ斯ま宜くを辞しむいかなれを這
 裡へ入ると請りて俵ある素食を乞ふ少劇爐辺にありて話
 説するうちや三更の九側もあしは女云すも旅行の勞苦も
 おすすも宿所へ往りてとく歌多くと一室なる裡へ伴ひ宿りたり
 菴の這小室に入り臥するの素帯間をゆるぎたりは生平美酒佳肴
 飽きりしは今宵素飯の清き人ありは僅くありしは腹中満ち
 飽きりしは今宵素飯の清き人ありは僅くありしは腹中満ち
 飽きりしは今宵素飯の清き人ありは僅くありしは腹中満ち

この有り女慌忙しく走出何ぞ少尉私語く伴ひあるを戸の隙より窺
 着より才枝大なる漢子の身は黒衣を披ひ腰間二口の朴刀を佩する
 地爐の辺よりうらちば女の酒肴を出し飲酌する時彼漢子私中のたる
 声しく云らく今宵こそ鷹きおそく彼所の谷底へ突は落しこれ微塵土
 になりて久ぬべし今日より誰より憚りのあえき快く相謀樂とこ
 人酒酌のほしく戯まはる折より柴門を荒ふ小叩音やあり女愕然と驚
 く云らく此地方は是幽陰の地はしく白昼も人跡稀なるは怪し余深
 夜なるも門を叩くは是狐狸の我門を鷹するやなるんは是彼人の冤鬼か
 るべしあふ怖しやと戦栗をばり門の頻と叩く彼漢子呵々と打笑し
 云ふんでさうさうもの有べきよし我往く冤鬼もあれ狐も何事引提
 まふべしと朴刀を帯門の方へ出行し何事よ大に鬧しく罵り叫んで白

刃を接する音聞へちるが猛呼と叫声しく物の倒し御音するに印しく
 戸を踏破りしつる者あり其人を着るも眼秀色白く身軀大なる法
 師の渾身赤く漆く右手小朴刀の明晃々なる血を灌ぐるを提て
 裡内へ入りしが忽ち女を提引出し云大逆不義の婦罰刀を受ふと彼朴刀
 を閃とこれ女の忽ち断つるのさふさふり了菴の原委此も野をうて
 多かりえま觀個室を窺ひ逃ると走出るを彼法師これを着る
 忽ち臂をのびし身柱を提へ大唱しく云汝も是姦邪の徒と既一刃を
 斬らんとははより菴戦栗とせし云小人さるも其徒にあはま只の
 修行の僧はしく今宵こそ者なりを乞へる者なりと前割りしれ一五十一
 を説話しく救ふ人と生息あり法師其も跪をひて云汝實は法
 なるべ我は需ふとあり此事さるも肯やを命を賜へし了菴命

新本屋流和巻之四



會本壁紙卷之四

八景



會本壁紙卷之四

八景

取多しあへ何等の命なりとも心ぞう乖りば法師云我り上皇山道極り
去は康安の春東宮を將とし南山を討功全を得べき處は君不明りて
諺を信じ余を謀まへき企ありと夢更別後善寺の城に退居し二心を
まき赤心を分疏すまでもさへよつとなきもけかく熟し思入功就名を逃
く身退く天の道なれば徒は冤罪に死んより不如陶朱公より比人あまを
前年洛陽ありり時情をけありし妾をさより此山中に隱道常
山に水を友とし心を慰む外は空料んや僧女忽恩を乖私まをさるけ
我を觸き今日谷底に落し殺さんと志ししと皇天の恩佑を得り真
葛よりすより幸して命を助り家々飯り斯のてく寇を報ゆいへも倭
まは是京北尹府の小吏なり是を殺しこの地の住居なりが今甚慮
へも去るやと想へども一錢の賄ひ故に決が路費を借んと思へり此も肯

はどくあへ吾汝を殺し金を奪ふべしとれかくされ汝が金へ我有
物なりと心より庵に懼生此時のと少しも偽らむ王計を講き得
る金を抄りて近より道誓喜人ごとくを接し懐に収り后儀ま
姫婦おろ戸を一箇の衣櫃に入二人とこれを荷ひ屋後の叢中へ埋ん
とすりきり菴過り衣櫃を俱に古井の裡に陥り且道誓言呼りて打
笑つて云汝我大事を穿とれんごとく思はばき命なり其處は何の
静に往生を遂へて猛刃を講して逃去りぬ庵に衣櫃をすりり水
底へ陥らむと心も登る夜叶ふを信しもすりておく時著し
ありちるも既して天明もあると心も更に出まき術もあく漸く心力
劣りて人より大に飢り且六實は十二の患苦に迫る折り忽ち此
響聞ゆると些く力を得り大に呼りり且五六個の小吏此處へ来り着

く何中人私語衣櫃と俣了菴を引揚はと均しく一言のてく及へ
高年小多小郷ちりまへ了菴の只是夢のまはしあちりく果然と一言
はし此時小吏の衣櫃を扱きよる二人の死骸ありりまへ大に訝りく同汝の
是富山道折言なりとや嚮は此地方は躲居のほし此衣櫃は死せる同僚の
出るよりく捉ゆべき官府の命を奉るまきるなり此吏の背置ひく何
等の縁由をりく我同僚を害せるもやはけり後從實を招説下く云
了菴之は疑りき哭く云小人すも道折言と申す素は祇園に位
は醫なるが事なりく西國へ赴んとし折阿しく此家より宿りし故は斯
の如くもきや遭りと昨宵より此光景を仔細に話説く只顧救ひ身へ
嘆りれば小吏これを辱し些く疑暗々しく之も此們道誓を面深き身へ
一先官府に申すしとひきまらむ往はほく京兆尹の衙府に至道小

訟庭に牽出する此京兆尹の則佐本依渡判官道言なり只今下吏の
報くもよりく腰に生る了菴を着る富山はあふさ其故は
同く了菴前云ははく實事を白状しれ乃祇園の保心
引合する聊も差さ其罪あきをりく衙府の門前におわく追放
すはちり方縁了菴の龍潭を避虎穴を逃まらるるしきしめて意
を身へりまも身は賤宝しく一錢もあふ累年の積悪よりて
便はべきもあふ今只是奈何も只得あふ急路頭はすぬひく逆耳
を食の身なりりて方見ちまはるる主計等如きを纏き其外平
良家の子弟等を牽引烟花を惑溺せしめは錢財を貪りする報ひ
忽ちまらるる飢寒の艱苦止時あふ既に二年をりるあふのて
清瀧川の辺を食をとりく徘徊しるある夕暮時年記せたりやる女

命目

長

の生は清らなるが此清滝川の岸は深き礫を拾ひて袂に入既し
 衣を脱んとすを了菴達とて衣を着けしは好悪の徒やまも素これ
 人間あまの怨慟の心を生じ慌忙しく走来りてこれを抱擁住りて婦人
 は何等の事ありしかかふあまの女男と云あま方具やと放ちて
 奴家世に存命なき事ありしか今此流に沈む身なり快く素懐を遂
 ちやくたんとす人若くは光景を着一着より足良家の女児は只
 一條の春踏は通る死するものぢやと精一若星を助得るの辛若
 流ありけき近日の飢寒を免るべし心中秘喜んて婦人幸
 甚くもす是の死を一條の想ひ所をも弁へまじとす人々此川は水は
 一くづてうく死するを得べき今我は其死へき縁故を説話し
 又宜き事もありぬしと勧沮りねば女は斯く心を苦しむ優愼めははま

まの人の事を説話し奴家の素庵岩邊鄙の者なるが名く京
 師は宮仕ありしは主翁奴家は懸想し終りて七月廿二日
 めを王媪これを知姫孫く奴家を害りしせを主翁精一今日も父
 を呼びて奴家を故御中伴のむ道まじり父の説話をゆめ家も飯ら
 血属のくも嫁まじり置りて宣へり奈何斯のとき才を
 甚慮へる嫁するを得べき進退こそ極りまれば道より走りて此流
 水才を洗めんといふ做つる水浅かしく死に至るじと宣へる願
 死まじき怨を教へてまじりて死するの后師父は此素庵門徒におはす
 奴家身辺に野郎の金をりてゆる寺院へ戸を収めり後世は追
 摩を做しきまじりて打嘆くしゆる庵其原委をゆめり野郎は金
 ありといへるも猛生質の悪癖を發し暴はけり涙を流して云帰る



白目木下草子巻六十四



待たぬ女を
湯の淵に
身を
沈めし

白目木下草子巻六十四

七二集

の言のてしんハ實ニチホ何ともすんきてしあまきま至まり貧道俗人
 ありあは做べき術もあるべけれも斯業門の才なればかば婦人の素意
 のましく快く往生をとげ多人追福のてしハ貧道が做せる業なれば勉
 むるべきはあまきま夫ハ最斯の一念より善惡の生をむくといふ
 苦痛あり往生するハ志くハあ一すく快く往生せんハ投讓の増り
 なるハあまきま云々ハ女熟くハ母くハ師父の教ハするてあま
 奴家投讓すべをまきまを云々ハ貧道おえしと腰纏へるはけ
 の細紐をいじ川邊はありする本の枝よりち掛斯のてし做るのよ
 益まるすの仙をすりハ失くくを放ちりハ猛首締四すをりハ七轉八倒
 七竅より鮮血滾々と流し出遠く苦く死を做りりハ七転八倒
 樹上ハ声あり呼燥脾胃とて均一團の鬼火隱とて東山

の方へ飛去りぬハ是等の光景を着て愕然として大に驚き做ら
 産の氣はわく猛一男児を産りたるが精神健やかなる生平は妻
 けりしとあらはれハ意をわく熟く想ひしハ名を竟るやをりハ故御飯
 難うしと今斯のてし障りなきとやうたはハ徒よ死まへま
 あまきま産る児を其すりハ母捧おきと忽此地を去りたるハ亦
 子の哭けりハ閻里の們此處へまり着るハ五十九條の老法師の益
 せる側ハ赤子あり人々異る處ハ一封の遺書あり披き閱るハ我
 死せりとあり人々不思議の想を做て歎収するハ此事世ハ眞
 人のさうあまきま實りハ未世の驗とて女もあまきま老法師の子
 産るハ世小あまきまを恥し終極とてハりハ當時天下ハ人々
 となりハ永く汚名を傳へたり素這遺書ハ前の孕るハ女ハ落

あり是渾々全計が妖崇の做所より積悪の餘殃念身子
まあり世に類なき悪名を千載のまにまに



